第１回 団地再生卒業設計賞 授賞作品

主催：NPO団地再生研究会 団地再生産業協議会

団地再生卒業設計賞 内田賞

加曽利 千草（慶応義塾大学 政策・メディア研究科 ）

団地再生卒業設計賞

国沢 和朗（横浜国立大学 工学部 建築学科）
西本恭子（大阪市立大学 工学部 建築学科）

団地再生卒業設計賞 奨励賞

牧野 恭久（東京電機大学 工学部 建築学科）

応募期間：２００４年３月１５日（月）から２６日（金）

審査委員： 審査委員長 内田祥哉（東京大学名誉教授　金沢美術工芸大学客員教授）
審査委員　野沢正光（ＮＰＯ団地再生研究会理事長　ＯＭ研究所代表取締役所長）
松岡拓公雄（滋賀県立大学環境科学部教授　アーキテクトファイブ）

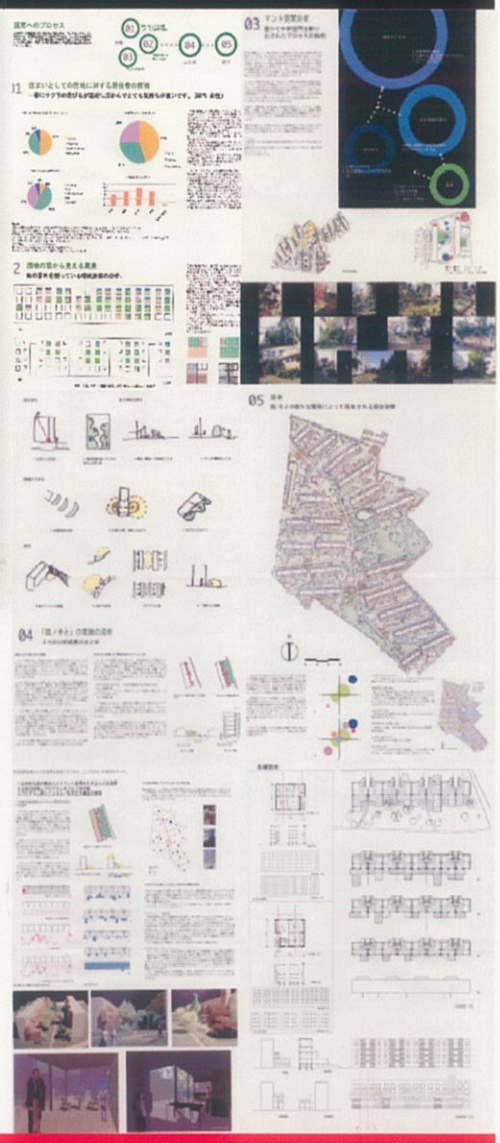
授賞作品の発表：表彰式のほか、「ランドスケープデザイン」誌（マルモ出版）
での発表の他、各種メディアでの公表を予定しています。

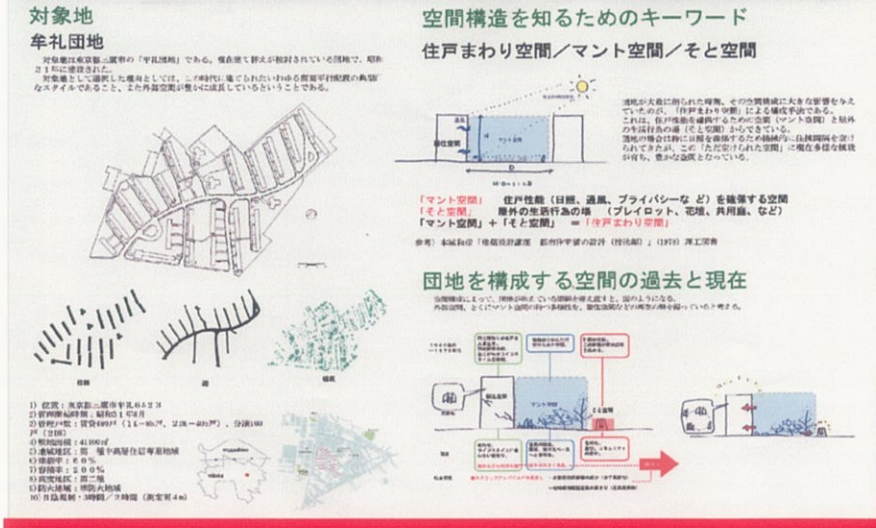
応募登録数：２６点
応募作品数：２２点

団地再生卒業設計賞
内田賞

「団地が持つストックを活かした新たな都市居住空間の研究及び提案
〜牟礼団地を対象として〜」

加曽利 千草
慶應義塾大学
政策・メディア研究科





野沢評
何より時間を経た団地の持つ外部空間の豊かさを主題においたことが優れている。作者が「マント空間」と呼ぶ団地内のオープンスペースの評価をアンケート、構成要素の分析という、客観的な指標によって示し説得力がある。また計画時の均一な外部空間利用を建築の再生に伴いいくつかの質の違うもの提案として評価再生する提案も優れている。その分既存集合住宅の再生案が幾分弱いのが残念である。

松岡評
現在の団地に残された環境は、都市の高密度化によって、逆に取り残された緑地や外部空間が独特の雰囲気を持ち、実は際だって価値がある。そこに着眼している。その空間を住居性能維持のための「マント空間」と名付け、その外部空間をユニット内から、あるいは周辺にも視野を広げ、多角的に見直し、意識レベルも含めた新たな関係に価値を見いだそうとしている。「マント空間」との接点である中間領域のしくみ、あるいは周辺にまでその恩恵を広げようという再生アプローチを高く評価したい。牟礼団地でのスタディでその考えを具体的に表現し、様々な外部空間との接点を付加して団地の住棟がさわやかな図面と共に生き返ってくるような、現実的で気持ちのいい提案である。

団地再生卒業設計賞
「recreating AIR
これからの都市、これからの団地」

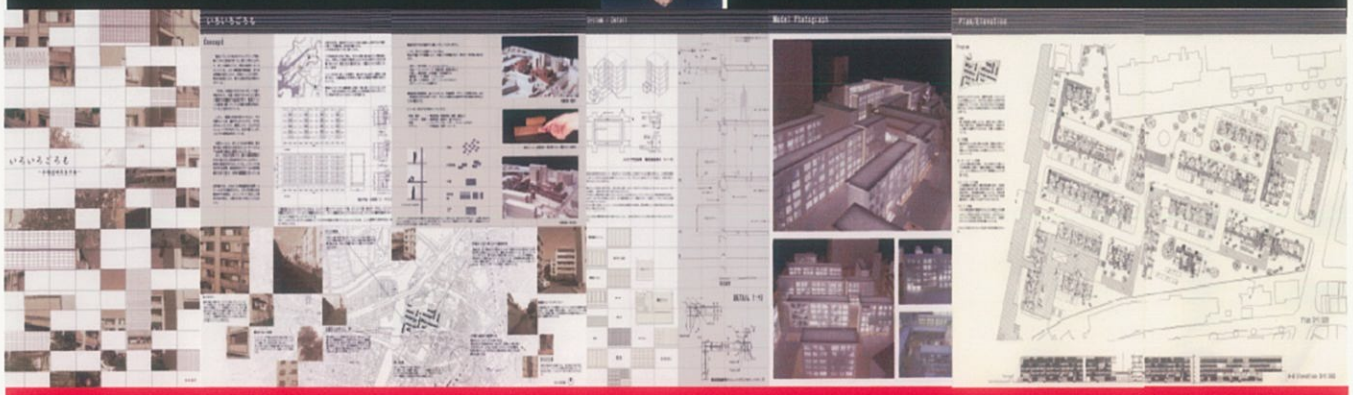
国沢 和朗
横浜国立大学　工学部建築学科

野沢評
再開発のすすむ横浜のウオーターフロントに取り残された団地を発見したことがこの計画の手柄である。ここをアーティストインレジデンス、クリエーターの拠点としようとの企図はこの土地の個性が説得力となっている。計画は既存住棟間のオープンスペースをギャラリー、カフェ等として活用することとガラスのスキンを纏う既存住棟の再生が絡み合って計画されているところに妙味がある。三つの外部が反転する関係にあるのもいい。大胆にもスケルトンのみ、裸にされた既存部の構造は大分危なっかしいのだが。

松岡評
横浜の都市を背景に、再開発に取り残されていくであろう、２０世紀の遺物である団地の風景を継承し、再生の要素として、新しく台頭してきた文化、芸術活動というニーズを半公共的な形で、取り込んでいこうという発想は健全であろう。既存の住棟からにじみ出してきた、目的空間が新しい外部空間を創出、ネガとポジの関係がやがてひとつの新たな環境へと、段階的に再構成されていく提案である。技術的、構造的な再生プロセスのイメージは弱いが、場所性、都市性を読み込んだ長期的な団地再生のプログラムの提案として評価するのが妥当である。

団地再生卒業設計賞
「いろいろ ごろも」

西本 恭子
大阪市立大学　工学部建築学科



野沢評
「いろいろごろも」とタイトルされた案。既存の住棟に今日的な視野から欠けていると考えられるもの、それらをいろいろ、衣のように纏わせる、しかもそれを「工業化システム」として考えるという提案である。ここでは耐震、環境、生活、など多様なテーマを均一な工業化技術として取り扱っているところが面白く感じた。耐震壁も、ダブルスキンも、エレベータも増築ユニットも、バルコニー付設も。この視点は生活者市民にとってきわめて普通のもののはずである。工学部で学ぶ人が失いがちな視点ではないか。最終ページの手描きの配置図画がその眼差しを示す。

松岡評
構造技術面、エネルギー面、機能面、環境面、システムなど様々なレベルでの再生手法を説きながら、実際の例をケーススタディし、画一的な再生でなく、個別に対応していくことを提示したある意味で現実的で正当な、期待されていたひとつの案と言ってよい。具体的にはこの案は、既存の住棟の配置や構成を守り、むしろ固定された均質な団地モデュールをベーシックフレームとして捉え、表層的な再生手法に徹しているが、周辺との関係や棟ごと、あるいは個々のユニットへの対応など、生活者の視点から、きめ細かく内外の空間を捉えており、生活の豊かさが伝わる案であることが評価される。

奨励賞
「ダンチノユクエ」

牧野 恭久
東京電機大学　工学部 建築学科

野沢評
私たちが将来の団地をイメージするときポジティブな「減築」をいつか考えることになるだろうと思う。この案は、そのことに触れる案である。「配慮」「変化のルール」と題された分析の部分が説得力もありしかも独特である。唐突にあらわれる廃墟のような形態も一貫したイメージの中にあることはわかる。しかし二つをつなぐ理屈がない。話題となったのはそこである。

松岡評
住棟が増築、あるいは減築していくプロセスがユニークである。溶けていくような変身は結構、日照、日影や地形を分析し、まだ利用できる空間を探してアルゴリズムで派生していくようなシステムをデザインしているといってよい。現実性に欠けるのが欠点だが、既存の四角い団地建築が、有機的な形態へと、建築と言うよりランドスケープ的な建築に変容する様が非常に面白く、意外性と、ある種のロマンを感じさせる。ここまで変身する案は他になく、刺激的でありこのような再生形態の柔軟性は評価したい。

第一回　団地再生卒業設計賞概評
審査委員長　内田祥哉

今回は第一回目なので応募者が少ないかと思われたが、募集側にとって予想外の数だった。
卒業設計というので、専門家からは、アイディアにも、内容密度にも、多くの期待はされていなかったようだが、記述・表現にも結構専門的知識をみせたものもあり、アイディアでは、既成の思考を越えたものがあって、これも、大いに裏切られた。提出物の表現は、最近のCAD普及の波に乗って、プロ以上の技術を見せるものもあった。入選者達が団地再生の分野で活躍されることに期待したい。

「第一回団地再生卒業設計賞」について

NPO団地再生研究会、団地再生産業協議会の主催する、全国の建築系大学の卒業設計の中からわれわれ研究会、協議会の主要な興味の領域である「団地の再生」をテーマとするものを公募し問題意識を共有する諸君の作品を全国に求める「第一回 団地再生卒業設計賞」は第一回であることの認知されにくい状況に関らず26人のエントリー、22作品の応募という、きわめて好ましい結果を得た。エントリーされた方々、作品の応募をされた方々に心から御礼申し上げる。私たちは、団地の問題とりわけその再生が若い学生諸君にとっても興味のある課題であり、全国の大学から多くの応募があったことに勇気付けられている。今回の応募者の中には、夢を持って戦後作られたこうした団地に生まれ育った人々がいるのかもしれない。団地再生研究会、団地再生産業協議会の会員には半世紀前これら団地の計画に深く関った人々も多く含まれる。今回の企画が世代をつなぎ建築、地域を考える継続的な機会、場になるよう今後も努力したい。

団地再生卒業設計賞の審査

審査は内田、野沢、松岡の三名により行われた。事前に野沢、松岡が10点満点で詳細に作品を評価した。
その結果につき内田先生を交えすべての作品につき話し合った。結果上位3点についての評価は一致し、発表のように決した。上位三作品の決定の後「ダンチノユクエ」とタイトルされた作品が話題となりその独自性を評価し奨励賞とした。選にもれた作品もどれもが今日の建築、とりわけ団地の抱える問題につき独創をもって提案しており多くの示唆を持つものであった。